

令和5年度 第2回宇都宮市地産地消推進会議 会議録	
日 時	令和5年7月24日（月） 午前10時～11時40分
場 所	宇都宮市役所14C会議室
出席者	<p>（委員）13名</p> <p>若 林 芽 育 （宇都宮市議会議員） 阿 部 恒 久 （栃木県河内農業振興事務所） 西 山 未 真 （宇都宮大学） 野 澤 克 子 （宇都宮市消費者友の会） 寺 内 美 栄 子 （宇都宮市農村生活研究グループ協議会） 手 塚 安 則 （宇都宮市園芸振興連絡協議会） 田 野 邊 大 介 （東一字都宮青果株式会社） 渡 邊 崇 （栃木県飲食業生活衛生同業組合） 増 渕 祥 子 （宇都宮市食生活改善推進員協議会） 佐 藤 要 （宇都宮市PTA連合会） 山 崎 裕 希 （株式会社オータニ） 金 原 恵 美 （株式会社Cooking & Glow） 山 口 美 輝 （市民公募委員）</p> <p>（事務局）9名 會澤次長， 枝課長， 小林課長補佐， 鈴木係長， 高橋総括， 河野主任， 福田主任 金子主任主事， 佐藤課長（宇都宮農業協同組合）</p>
欠席者	<p>福 田 久美子 （宇都宮市議会議員） 見 形 繁 （宇都宮農業協同組合） 佐 藤 弘 大 （公益社団法人 宇都宮青年会議所） 松 本 謙 （株式会社ファーマーズ・フォレスト） 伊 藤 元 士 （宇都宮青果商業協同組合） 福 田 公 一 （株式会社東武宇都宮百貨店） 高 橋 立 志 （市民公募委員）</p>
公開・非公開の別	公 開
傍聴者	1人
内 容	
	<p>次第1 開会 午前10時（進行：鈴木係長）</p> <p>次第2 会長あいさつ</p> <p>次第3 新任委員紹介</p> <p>次第4 議題 （仮称）第3次宇都宮市地産地消推進計画の策定について</p>

事務局（高橋）	<p>【事務局説明】（資料 1）</p>
手塚委員	<p>【意見等】</p> <p>約 3 年前になると思うが、全農や農協から補助金が出ていて、減農薬米を推進していたことがあると思うが、現在どのような状況になっているのか確認したい。</p> <p>また、補助については、当時宇都宮市からも出ていたと記憶しているが、現在は無い状態にある。当時、減農薬の取組は目標を達成したということで、なくなったものと記憶している。</p> <p>現在、全国的には、学校給食において減農薬のお米を子どもたちに提供する動きが多いと思うが、できればそういう減農薬のお米を生産している農家が希望を持って作れる環境を整えて、子どもたちに食べさせてあげるといった方向性ができれば、良い取組になるのではないかと。</p>
事務局（鈴木）	<p>減農薬の米栽培に対する補助は出していないと思う。減農薬米については今日いただいたご意見を踏まえて、今後の検討に繋げていけたらと思う。</p>
西山会長	<p>安心感を高める仕組み作りという部分で、グリーン農業の実践にあたり、生産者が希望を持って生産に取り組めるよう必要な支援をとということでご検討いただきたい。</p>
若林委員	<p>市民農園について、今は個人で小さな農園を借りる方や、自分が住んでいる地域とは別の地域に癒しを求め農業体験をされるというライフスタイルを持っている方は非常に多いと思う。</p> <p>宇都宮市における市民農園の現状、需要と供給がどのような状況か教えてほしい。人気でなかなか借りづらいという声を聞いたことがあった。</p>
事務局（福田）	<p>市民農園につきましては、ご指摘のとおり、かなり需要があり、すぐには借りられない状況にあると把握している。</p>
若林委員	<p>借りたいと思っている方も多くと耳にしているので、ぜひそういう事業も広げていけたら地産地消の推進に繋がるのではないかと。</p> <p>もう一つ、宇都宮農産物のブランド化について、宇都宮には、美味しい農産物や加工品があって、生産者も本当に一生懸命作っていただいている中、どうしても県のイメージが一緒くたになってしまっていて、なかなか宇都宮産として捉えてもらえない印象がある。もう少し宇都宮産農産物のブランド化、統一化を図っていった方がより伝わりやすいのではないかなと思っていますがどうか。</p>

事務局（鈴木）	<p>ご指摘のとおり、宇都宮においてもブランド化を進めており、その一つとして目印となる統一マークの活用を図っている。現在、16品目あるブランド品目で統一マークシールの貼付や販促資材などの活用により、JAと連携してスーパーなどでブランドをPRしている。</p>
手塚委員	<p>熊本県のくまモンマークのように、外でも中でも積極的に活用して、よりブランド化を図っていく必要があるのではないか</p>
西山会長	<p>地産地消の会議なので、ブランド化と地産地消の関係をまとめさせていただくと、対外的な知名度と地域の中での支持の双方をどのように高めていけるのかというところで共通しており、やはり宇都宮市民が宇都宮産に愛着を持ってもらうことが、ブランド化につながるので、ブランド推進と地産地消の取組をうまくつなげられるよう工夫しながら進めてほしい。</p>
事務局（鈴木）	<p>市民に宇都宮産がきちんと見えるようにしていく必要があると思うので、ご意見を踏まえながら取組を進めていきたい。</p>
山口委員	<p>農業や農村の魅力発信のところで気になったことがある。</p> <p>我が家は、市東部で梨などを中心に生産している農家で、ここ数年はコロナの影響でできていなかったが、30年前から、小学生を対象に年間13校から15校の収穫体験を毎年受け入れてきた。</p> <p>自分の子どもが小学校に入ったときに、果樹園で育った娘でさえ、畑では遊んでいましたけれども、出荷時期は忙しくて、収穫の喜びとか、そういう体験をさせてあげられなかったことに気づき、地元の小学生を受け入れてあげようと思ったのがきっかけであった。</p> <p>今、体験した子どもたちが大きくなって、車に乗るようになったり、学校の先生になったり、それで、自ら梨を買いに来てくれたり、生徒たちを連れてきてくれたりしている。</p> <p>体験時には「宇都宮にはたくさん美味しいものがあるんだよ。この清原地域にも梨だけではなく、他の野菜も美味しいものもたくさんあるよ。スーパーに行ったら、お母さんと宇都宮産かどうかを確認して買ってね」という言葉を、必ず最後に伝えることをずっとやってきたところであり、これまで自分たちがやってきたことが、このような形で戻ってきて、応援してもらえるということは、なかなか収益には繋がらないかもしれないが、こういう思いを伝えていくことは大切なのだと思う。</p> <p>このような中、生産者側としては、受け入れるがすごく大変ということがある。出荷の最盛期に対応することになるが、対応する2時間という時間でもかなり作業がずれ込んだりする。</p>

事務局（鈴木）	<p>自分の場合は、学生のアルバイトやボランティアで手伝ってくれる人に来てもらって、サポートしてもらっている。また、地元の事業者に体験ツアーを組んでもらい、取りまとめてもらうなど、様々な方法があると思うが、何かしら生産者の負担も軽減しながら、みんなで魅力発信をできるとよいと思う。</p> <p>農業や農村に触れる体験はとても大切だと思っている。そのような中で、人手不足とか受け入れ側に負担がかかっている状況のご意見をいただきましたので、なにかできることがあるか検討を進めていきたい。</p>
野澤委員	<p>食育フェアや農林業祭など年に何回か関係する大きなイベントがあるが、そのときに地産地消のブースを設けて、宇都宮市にはこんな農産物があるというのを実際に見ていただくのがよいと思う。</p> <p>宇都宮産の農産物をつかった料理を実際に見せて、この時期にはこういう野菜があってこんな食べ方があるよというものを実際に見ていただくのが、すぐわかりやすいと思う。コロナも落ち着いてきてイベントが数ヶ月おきにあるので、そういうときに実際にやっていただけるとより伝わると思う。</p>
事務局（鈴木）	<p>地産地消推進のイベントやフェア、各種広報での周知、あと昨年度は駅東口でのマルシェ開催など、様々な機会でもPRに取り組んでいる。</p> <p>食べ方の提案まではできていないが、今後も独自の取組や市内で行っているイベントとの連携を図りながら、PRを積極的に進めていきたい。</p>
西山会長	<p>先ほどの意見に加えると、イベントにおいても、ただPRするのではなく、一般の市民の方が収穫に参加して、その方たちが販売まで行うなど、市民の顔が見える仕組みが必要であると感じる。</p>
佐藤（要）委員	<p>学校給食について、お米に関してはほぼ宇都宮産となっており、野菜や果物についても地産地消を進めていて、地元のことを農家から直接納品するケースが多くなっていると思う。</p> <p>ただ、市街地にある学校に関しては、そういった野菜を直接生産者が届ける環境がないと周りからは聞いており、おそらく郊外と市街地の学校では地産地消に差があるのではと感じている。</p> <p>それで、農協や市場が協力して、宇都宮産のものを学校に、特に市街地の子どもたちに届けられるようなシステムを考えていただければと思う。</p> <p>やはり、地産地消、食育の推進にあたっては、子供たちに対する意識付けが重要だと思うので、市内全域でシステム化されて、配送ができる体制を整えば、農家も協力しやすいと思うので、ぜひ検討していただきたい。</p>

事務局（鈴木）	<p>生産者と学校とのマッチング事業を進めている中でも、委員のご指摘の通り、市街地は農家が持ち込む手間がかかることから難しいという課題を感じている。物流面での課題解決が必要であり、解決に向けた調査をまずは進めていきたい。</p>
事務局（佐藤）	<p>地域の農家も高齢化しており、また市街地ではなかなか農産物が提供できないということは認識している。JA うつのみやでも、学校給食で地場野菜を使ってもらえるよう、市や市場と連携して取組を進めているところである。また、それをいかに食べてもらうということで、学校で、農家の話を給食の時間に聞いてもらう事業などを進めていきたい。</p>
阿部委員	<p>現在の宇都宮市の進捗状況を見ると、宇都宮産農産物を積極的に購入される市民の割合が増えてきていることは喜ばしいことであって、県も一緒に目標である100%を目指していきたい。また、生産履歴の記帳割合も、当初4割から9割まで上昇している。県でも年2回、直売所巡回を行って、記載をお願いするとともに、生産者にも常にそういう意識を持ってもらうよう取組を進めていきたいと思っているので、今後も引き続き協力をお願いしたい。</p>
西山会長	<p>資料16ページに農業や地産地消に関連する取組が列記されているが、SDGsのところに、「飢餓をゼロに」「全ての人に健康と福祉を」があるように、現在、食の格差という問題が顕著化してきていると思う。日本社会全体で見ると、まだ飢餓の問題は薄まってしまいが、地産地消は、やはり地域に目を向けて地域の中で地域の問題を解決していくという考え方なので、そういった地域の子ども食堂であったり、フードバンクであったり、飢餓や食の問題に対して進められている取組も地産地消としてきちんとフォローしていくことも必要ではないかと思う。</p> <p>それから、21ページの課題の整理のところ、「市民と農家を結ぶ地産地消の強化」の考え方や、個別施策においても、市民が支える仕組みづくりという表現はとてもよいと思う。</p> <p>しかし、「目指す姿」では、市民ではなく、消費者という表現に代わってしまっている。やはり、広く当事者として市民一人一人が地産地消に関わって変えていくことが必要なのでこの表現は「市民」に修正すべきと考える。</p> <p>私自身の意見についてももう少しお話をさせていただくが、現在、国でも食料・農業・農村基本法の見直しが行われており、その中でも、食料の安全保障について積極的な議論が行われていて、地産地消に対する期待もずいぶん変わってきている。</p> <p>そのような中で、やはり求められるものとしては、地域で食と農業が循環できるシステム、先ほども意見にあったが、地域内で流通、物が回る、人が回るシステムを作っていくということが、地産地消の大きな役割になると思われ</p>

	<p>る。</p> <p>フードシステムも、これまでの東京などの大消費地を中心とした市場流通の体系だけでは、地域社会や農業が抱える問題の解決は難しい。</p> <p>ローカル・フード・システムという考えがあるが、これは地域の問題を地域で解決する中で、食や農業、経済やコミュニティが結ばれていくシステムであり、アメリカ国内では実際に取り組まれている事例もある。</p> <p>現状は、個々の課題に対し、個々で対応している状況にあるが、人とモノをうまく繋いでいくことができれば、都市や農業の課題もこの仕組みの中で解決につながっていく流れになると思う。佐藤委員のご意見にあった市街地の小学校での地場野菜の提供もその一つになるのだと思う。</p> <p>私のゼミ生が卒業論文で宇都宮市内のフードバンクや子ども食堂の取り巻く環境を調べたことがあり、それによれば、フードバンクや子ども食堂を中心に、生産者やいろいろな事業者が結びついて環境ができていく現状が見えてきた。先ほどの学校給食の流通も、この中で協力いただける可能性があるわけで、つまりローカル・フード・システムの要素はすでに揃っていると思われるので、宇都宮はシステム化を進めやすい環境ではないのかと感じているところであり、そこを今後の目標にしていくことも大事ではないか。</p> <p>モノについても、ガーデンバンクや空き家バンクがあるが、市民農園の需要がすごくある一方で、耕作放棄地も増えている。農村では空き家も増えており、一方で地域の交流拠点として農村の空き家の活用の需要もある。まだ、うまく結びついていないのが現状である。</p> <p>これらの食と農をはじめとした社会課題を今ある人・モノを繋いでいき一つずつ解決していく、計画の中でどこまでできるかはあるが、地産地消の大きな目標になってもよいのかなと思う。</p>
若林委員	<p>会長のご意見の中にあつた、使われていないもの、それを形を変えて生かしていく、使い方を探していくことが大切だと思う。今の時代の流れでいえば、例えばキッチンカーの活用など色々な資源をうまく活用できる方法をみんなで考えていくことも必要なのかなと思う。</p>
金原委員	<p>私も食育指導士という資格を16年前にとり、食育や地産地消として、宇都宮の旬の野菜をみんなで食べましょうという、子どもに料理を教える活動を続けてきた。また、地元野菜を使ったピクルスブランドを立ち上げ、宇都宮の「宮」を冠しているだけあり、たくさんの応援をいただいて事業も軌道に乗ってきたところである。</p> <p>ピクルスは形の悪いものでも商品化が可能で、かつ1年から2年と長期保存が可能となる。また、宇都宮市内にある北関東唯一の酢蔵のお酢を使っており、地域を応援していくことにもつながるので、今後も加工事業や自身の食育活動を通して地産地消に役立つものがあれば、協力して盛り上げていきたい。</p>

山崎委員	<p>地域密着のスーパーという形で事業展開しているところであり、協力できるところはないかなという視点で意見を聞かせていただいたところである。今すぐにこれをというようなところはなかったが、我々はやはりお客様がすぐそばにいて、その中で困っていることなどお話を聞く機会も多いので、そういう声などもお伝えしながら、今後も協力して地産地消を推進できればと思う。</p>
西山会長	<p>学校給食については、先ほどの私の意見も踏まえ何か追加で付け加えるような意見はあるか。</p>
佐藤（要）委員	<p>学校給食については非常に衛生面に気を配って対応いただいております、食材の保存場所の確保が難しいということで、使う日の朝早く納品しないといけないという課題があるので、先ほどのフードシステムのような、そういった課題をクリアできる方法があれば、市内の各学校で同じ時期に使用することは可能だと思ふ。いずれにしても、現在給食を支えている各団体との兼ね合いや負担もあり、難しいことではあると思ふが、実現を目指し進めてほしい。</p>
西山会長	<p>これまでの取組を否定するのではなく、やはり、これまでやってきたことを少しずつ変えていく、皆が当事者となって取り組まなければいけないと思ふ。</p> <p>岩手県では、20年前から県知事主導で地産地消に全体で取り組んできているところであり、例えば、加工品をうまく使うことでより地産地消がやりやすくなるということで、加工業者も含めて地産地消を進めてきた経緯がある。このように皆が同じ方向を向いて議論を進めれば、きちんと棲み分け・共存できるシステムができると思ふ。</p>
増渕委員	<p>先ほどもイベントでのPRという話があったが、私どもは食生活改善推進協議会としてブースを毎年出している。ただ、コロナで最近思うように活動できていなかったところだが、やっと落ち着いてきたところで今年はもう少し広く活動をと考えているところである。</p> <p>私たちは健康な食生活の実現を観点として主に活動してきたので、地産地消を直接的には取り上げてはなかったが、今日いろいろご意見を伺い、地産地消の大切さについては非常に感じる場所があった。ついでに、パネル展示などでも役立つことがあると思ふので、ぜひ協力して取り組んでいきたいと思ふている。</p>
田野邊委員	<p>地産地消推進店は増加しており、地産地消の認知度も向上していることから、これまでの取組成果が出ているものと感じる一方、農業も経済活動であり、高齢化や資材等生産コストや流通コストの増大など、農業を取り巻く環境が厳しさを増す中、農業を継がせられないという声も多く聞かれており、今後も引</p>

	<p>き続き様々な取組を進めていかなければならないと感じている。国も、国内消費拡大はもちろんのこと、例えば輸出に力を入れてみたりと色々なことに取り組んでいるが、市場関係者としても、今の市場流通の中だけで課題の解決を図ることは難しいと感じる。</p> <p>地産地消の推進にあたっては、しっかりと地域の中で宇都宮産の認知度を上げることや、地元農産物を個性化してターゲットを絞って発信することなどやるべき取組はまだまだあると感じる。また、手に取った農産物が宇都宮産であることをきちんと伝える取組はより強化していく必要があると感じる。</p> <p>学校給食の地産地消についても、JAをはじめ関係者と一緒に取組をやらせていただいているが、旬の時期になると、その野菜を市内の学校給食で一斉に使用することが多いが、旬であっても時期により市内産品物が少ないこともあることから、そこに注文が集中してしまい対応できないという課題があり、マッチングをしっかりとできるような情報の共有化を進めていく必要があると感じている。</p> <p>また、農家が直接納める方法もよいが、八百屋側からすれば、不足した野菜を少しだけ持ってきてほしいなど需給調整のみを行うことになり、その負担や、経営への影響もよく考慮する必要がある。このように、様々な関係者がかかわっていることから、よく情報共有を図って同じ方向に向かうことが必要であり、そうなれば、これらの課題も解決できると感じている</p>
西山会長	<p>田野邊委員ご指摘のとおり、地元の生産や流通の中にある課題に合わせた取組を考えることが必要だと思う。提案したローカル・フード・システムも考えとしては同じで、地域のあった課題解決の最適なシステムということである。</p>
寺内委員	<p>小学生以下のお子さんとの農業体験を5年ほどやっており、その中で、地元で採れた野菜と伝え食べてもらおうと、いつも食べないのに今回はよく食べるという声を聞く。このような体験活動に来てくれる親子は食や農業に対して関心が高く、体験や呼びかけを通して実践してくれるようになるのだなと感じる。一方で、より広く市民の皆さんが、新鮮さなど地産地消の良さを求めて、スーパーや直売所で地元産農産物を買ってもらうためにどうしたらいいのかも考えなくてはならない。</p> <p>消費者は目に見えないとなかなか意識を持ってないと思うので、フェアやキャンペーンも目立つよう、また先ほど説明のあった統一マークもどんどん貼付して、みんなの目に留まるようになれば多くの人が意識して地産地消に取り組むようになると思う。</p> <p>また、コロナ禍で長い間イベントもやってなかったこともあり、これまでイベントを行っていた人たちの中には士気が下がってしまい、もうやりたくないとなってしまっているということもあると思う。PRの強化にあたってはそういったイベント参加者へのフォローも必要となっているのではないかと。</p>

渡邊委員	<p>私ども組合の多くの飲食店は小規模で、家族経営という事業体が多い中、現在、電気や油の価格が日々すごい勢いで上昇しており、コロナ禍が終わっても業界はますます厳しい状況となっている。</p> <p>地産地消を積極的にアピールしているお店もあるが、多くのお店で経営が非常に厳しい状況にあることを考えると、地産地消によるブランドイメージ向上も必要ではあるが、やはり価格やコスト面での地産地消による恩恵がないと更なる取組推進はなかなか難しいと感じる。地元の規格外野菜を上手にかつ安価に使用できる供給方法などを考えていく必要があると思うし、そういった取組を地産地消としてアピールしていければなおよいと考えている。</p>
西山会長	<p>委員の皆さまより、それぞれの立場から活発な意見をいただき感謝申し上げます。いずれも大切な意見でありますので、事務局でよく整理いただき、計画策定に活かしていただきたい。10年後に向け、ぜひよい方向に変化していければと思うので、皆さんも引き続きご協力をよろしく願います。</p> <p>次第5 その他 今後の進め方等について 【事務局説明】 ⇒質疑等なし</p> <p>次第6 閉会 午前11時40分</p>
書記：事務局（農林生産流通課農産物マーケティンググループ 高橋）	

会議録について署名いたします。

令和5年8月21日

会議録署名委員 _____

会議録署名委員 _____